

プログラム・ノート

八木宏之

CMG2025の開幕を飾るのは、巨匠、堤剛と若き俊英たちによるチェロ・カルテットである。ときに朗々と旋律を歌い、ときに縁の下でアンサンブルを支えるチェロの多彩な魅力を、大作曲家の名旋律や、歴史的なチェリストによる傑作を通して隔々まで味わうプログラム。個性溢れるチェリストたちの世代を超えた対話を心ゆくまで楽しみたい。

J. S. バッハ(トーマス=ミフネ 編曲)：管弦楽組曲第3番 ニ長調 BWV 1068 より 第2曲「G線上のアリア」(チェロ四重奏用編曲)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の管弦楽組曲第3番(BWV 1068)の第2曲「エール」は、19世紀ドイツのヴァイオリニスト、アウグスト・ヴィルヘルミ(1845～1908)が、この作品をヴァイオリンのG線のみで演奏できるように編曲したことから、「G線上のアリア」という愛称で呼ばれるようになった。本日演奏されるのは、バイエルン放送交響楽団の首席チェリストを務めたヴェルナー・トーマス=ミフネ(1941～2016)によるチェロ四重奏版である。

フレスコバルディ(カサド 編曲)：トッカータ(チェロ四重奏用編曲)

『トッカータ』は、スペインのチェリスト、ガスパール・カサド(1897～1966)が、初期バロックの時代に活躍したイタリアの作曲家、ジローラモ・フレスコバルディ(1583～1643)のスタイルをもとに書いたとされる作品で、長らくフレスコバルディの『トッカータ』をカサドがチェロのために編曲したものだといえられてきたが、カサドによるフレスコバルディへのオマージュだという説もある。出版は1925年。哀愁に満ちた旋律がチェロの魅力を存分に引き立てる。

モーツァルト(ムーア 編曲)：

オペラ『フィガロの結婚』K. 492 序曲(チェロ四重奏用編曲)

オペラ『フィガロの結婚』はフランス革命前夜の世相をユーモラスに描いた、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の代表作のひとつである。封建的な貴族の主張する「初夜権」をめぐるドタバタ劇は、エネルギー溢る序曲で幕を開ける。アメリカのチェリスト、ダグラス・ムーアによるチェロ四重奏版は、チェロの機動性を巧みに活かした編曲である。

クレンゲル：主題と変奏 作品28

ドイツのチェリスト、ユリウス・クレンゲル(1859～1933)は、1881年から43年もの長きにわたってライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席チェロ奏者を務めた名手である。優れた教師としても活躍したほか、チェロのための作品をいくつも残しており、優雅で気品のある主題と6つの変奏からなる『主題と変奏』(1892年出版)は、チェロ四重奏のための貴重なレパートリーとして定着している。

ゴルターマン：ロマンス 作品119-1

ゲオルク・ゴルターマン(1824～98)は、19世紀のドイツでチェリスト、オルガニスト、指揮者、作曲家として幅広く活躍した。ゴルターマンの作品で、今日まで演奏され続けているのは主にチェロのためのレパートリーである。チェロ四重奏のための本作は、「ロマンス」と「セレナーデ」の2つの部分からなる小品の前半部分にあたり、ドイツのロマン派らしいあたたかみのある旋律が胸を打つ。

ハイドン(ピアティゴルスキー 編曲)： ディヴェルティメント ニ長調(チェロ三重奏用編曲)

ヨゼフ・ハイドン(1732～1809)が仕えたニコラウス・エステルハージ伯爵は、音楽をこよなく愛し、自らもバリトン(ヴィオラ・ダ・ガンバの仲間であらう)の演奏を嗜んだ。ハイドンは伯爵のためにバリトン用の作品を数多く手掛け、とりわけバリトンとヴァイオリン／ヴィオラ、チェロの三重奏曲を126曲も書いた。『ディヴェルティメント』は、ウクライナ生まれのチェリスト、グレゴール・ピアティゴルスキー(1903～76)が、1760年代から70年代にかけて作曲されたそれらの三重奏曲から抜粋して、チェロ三重奏のために編曲したものである。

グリュッツマッハー：奉獻聖歌 作品65

フリードリヒ・グリュッツマッハー(1832～1903)は19世紀、ドイツのチェリスト。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団やドレスデン宮廷楽団の首席チェロ奏者を務めたグリュッツマッハーの華麗なテクニックは、ドイツのみならずヨーロッパ各地で賞賛された。チェロのための教本や作品を多く残しており、1885年に発表された本作では、プロテスタントの聖歌のスタイルによる素朴な旋律が、チェロの厚い響きに乗せて伸びやかに歌われる。

ポッパー：2つのチェロのための組曲 作品16

ダーヴィト・ポッパー(1843～1913)は、チェコのプラハに生まれたチェリストで、ウィーン宮廷歌劇場管弦楽団の首席チェロ奏者を務めた。退団後はソリストとして活躍し、晩年はブダペストを拠点に後進の育成にあたった。ハンス・フォン・ビューロー(1830～94)はポッパーの演奏を絶賛し、彼のキャリアを後押ししたという。1876年に出版された本作は5つの小品からなり、重音から技巧的なパッセージまで、チェロのヴィルトゥオジティを隅々まで堪能できる。

ベートーヴェン：二重奏曲 変ホ長調 WoO 32 「2つのオブリガート眼鏡付き」 (チェロ二重奏による)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は、劇的な闘争だけでなく、肩の力の抜けたユーモアも愛する人物であった。1796年から97年にかけて作曲された本作もそうした彼の個性を示す作品である。奇妙な副題は、本作が眼鏡をかけたヴァイオリストとチェリストのために書かれたことに由来すると考えられている。本日はヴィオラのパートもチェロで演奏される。